

道南太平洋海域スケトウダラニュース

平成 26 年度 第 2 号 2014 年 12 月 1 日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

平成 26 年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（2 次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2014 年 11 月 18～23 日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深 100～500m の海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を下回った。
- ・ 魚群反応の強い海域は苫小牧～鷓川沖及び恵山沖。
- ・ 反応の比較的強い水深は 350～400m（海底に張り付いた反応は 200～250m 中心）。
- ・ 漁獲物は、未成魚（0 歳魚）が多かった（特に渡島沖）。
- ・ 水温は胆振沖でほぼ平年並み、渡島沖でやや高い。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも胆振海域の 172、173 海区（苫小牧～鷓川沖）及び渡島海域の 192 海区（恵山岬沖）に強い反応がありました（図 1・2）。
2. 海域平均の反応量は、前年度を下回り、2009 年度以降では最も低い値となりましたが、それ以前の年度（2007 年度を除く）よりは高い値となっていました（図 3）。
3. 魚群反応は、水深 150～500m の範囲に観察されました。特に水深 350～400m にかけて強い反応がみられましたが、水深 350m 以深の反応は海底から浮いた反応となっており、海底に張り付いた反応は水深 200～250m 前後が中心となっていました（図 2・4）。
4. トロール調査の結果、水深 250m 付近の漁獲物は尾叉長 10cm 前後の未成魚（今年度生まれの 0 歳魚）が主体となっていました（図 5）。特に恵山沖で行ったトロール調査では、漁獲されたスケトウダラのほとんどが刺し網漁業の漁獲対象とならない 0 歳魚となっていました（図 5）。
5. 調査海域の水温は、胆振側（登別沖）ではほぼ平年（2002～2013 年度のこの調査における平均値）並み、渡島側（南茅部沖）では水深 100～300m にかけて平年よりもやや高く（水深 150m 付近で約 2℃、水深 250m 付近で約 1℃）なっていました（図 6）。

以上の結果から、今後の魚群の来遊量は昨年度を下回る可能性が高いと予想されます。特に渡島沖では、恵山沖に強い魚群反応がみられるものの、魚群が海底から浮いていることや未成魚（0 歳魚）が主体となっていると考えられることから、魚群反応ほど刺し網にスケトウダラ成魚が掛からないといった状況になる可能性があります。

なお、次回の調査は年明け後の 1 月中旬（2015 年 1 月 13～21 日）を予定しています。調査後にまたスケトウダラニュースを発行して、分布状況等をお知らせします。

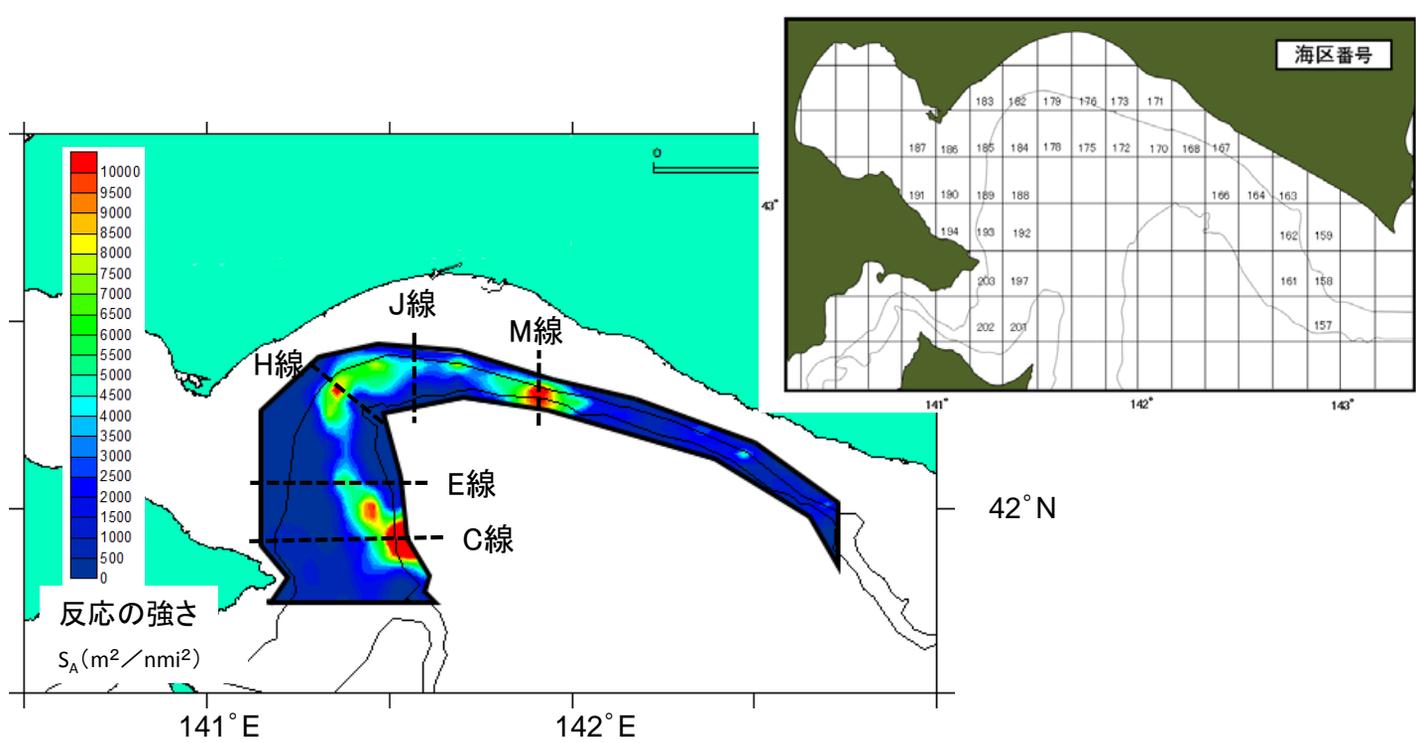


図1 調査海域における魚群の分布

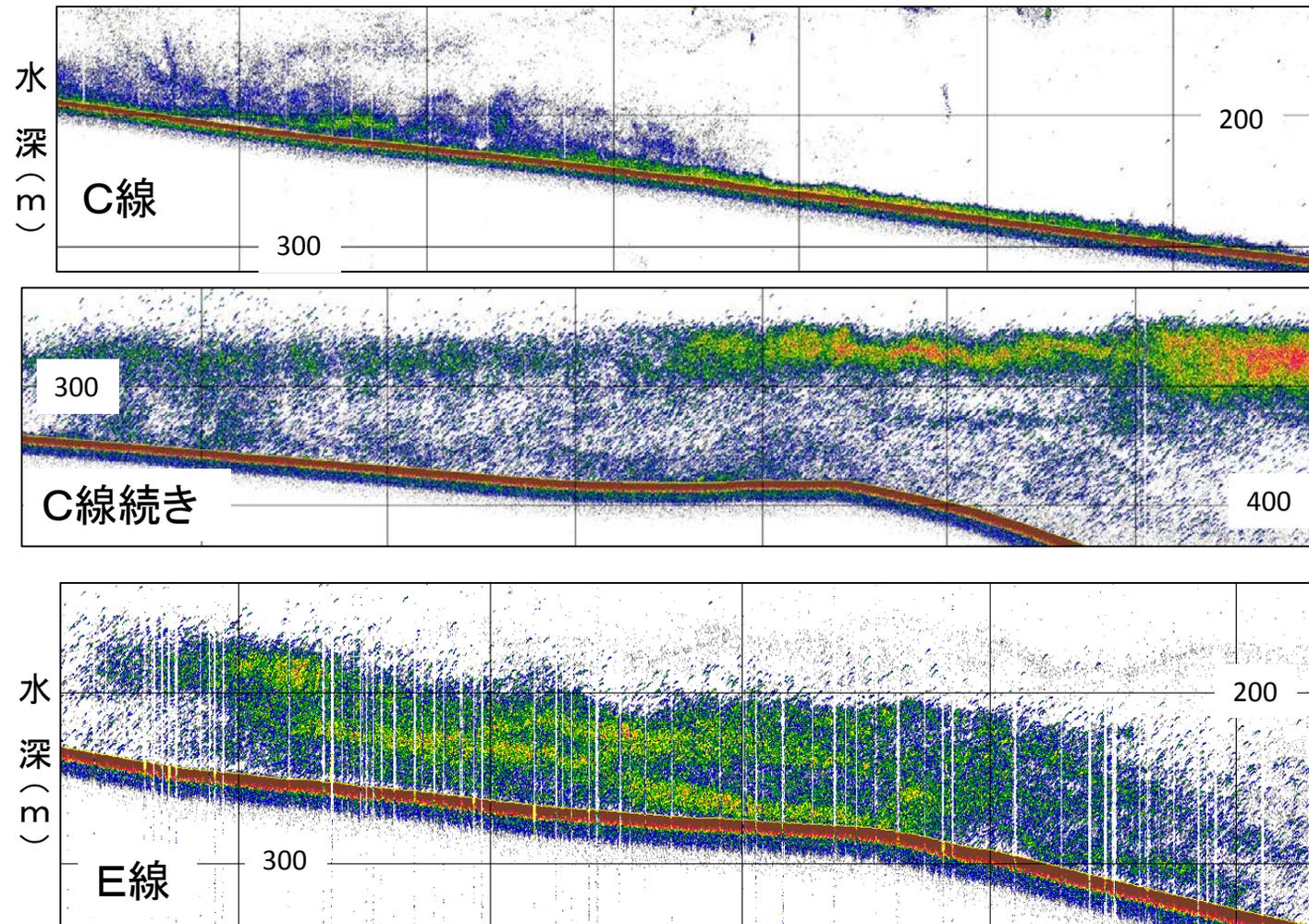


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)
 (図中の水平ラインの間隔は1マイル、鉛直ラインの間隔は100m)

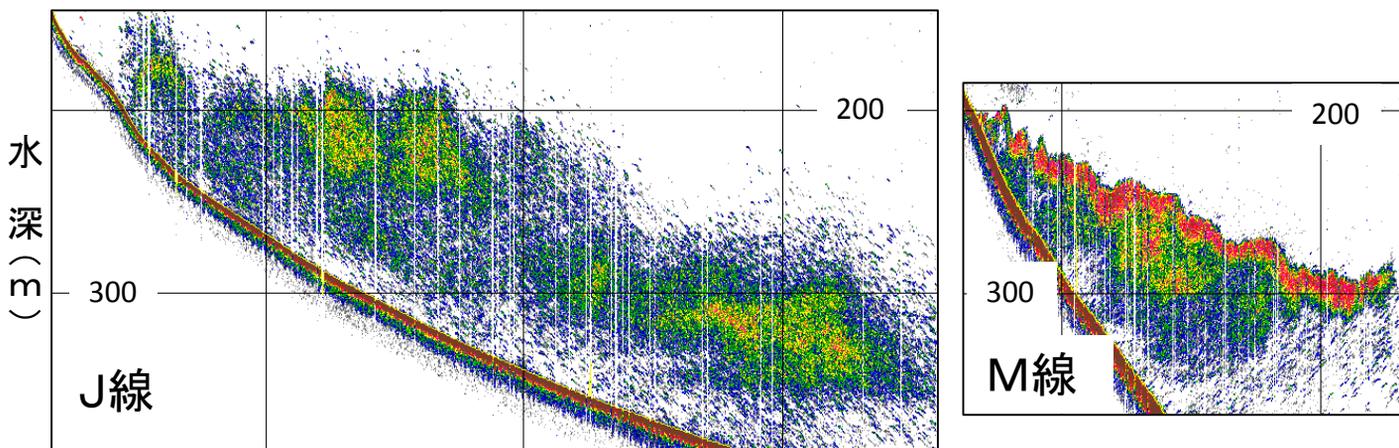
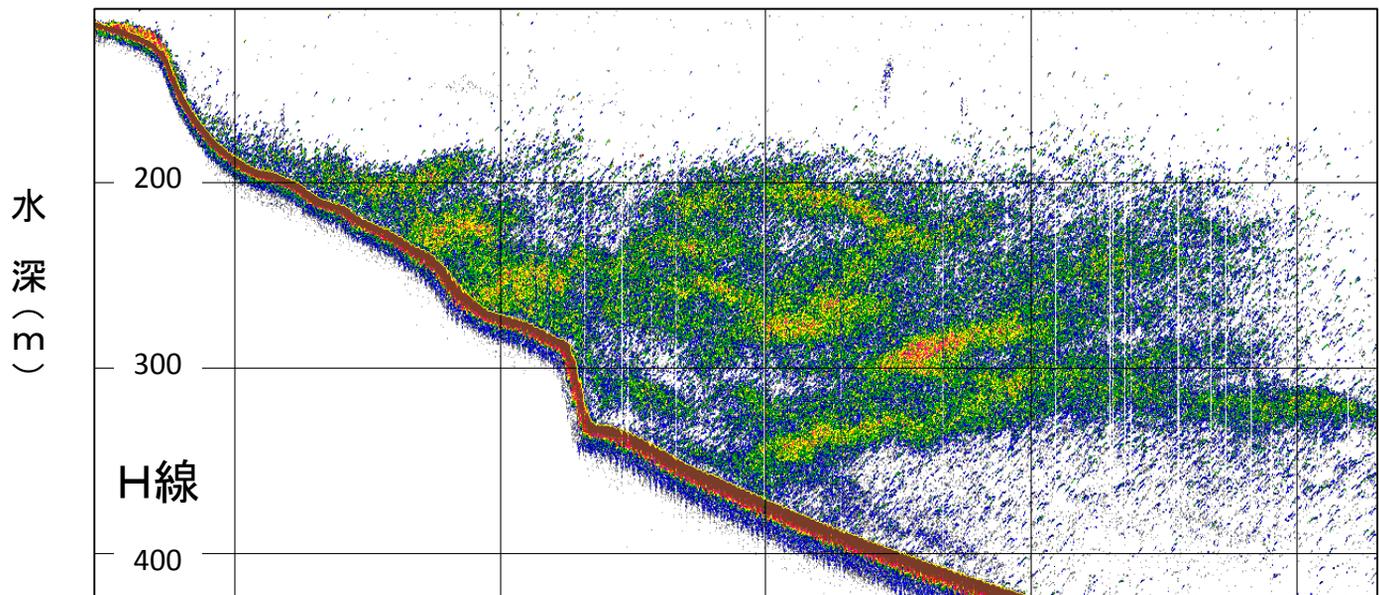


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

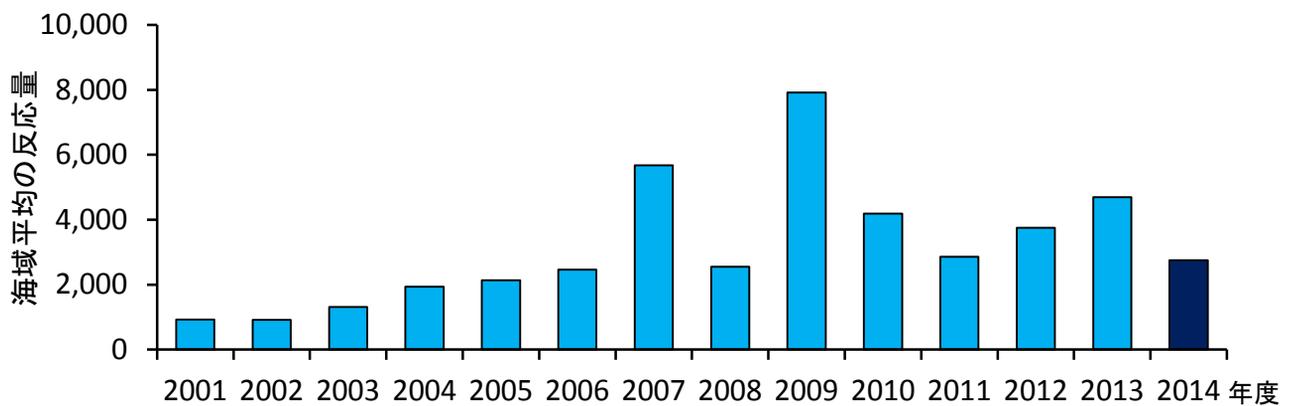


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

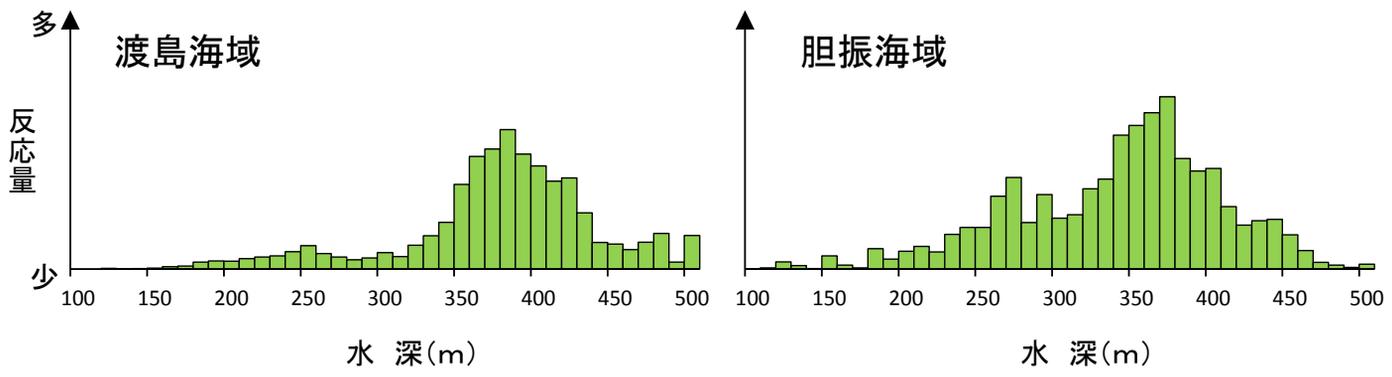


図4 水深別の魚探反応量

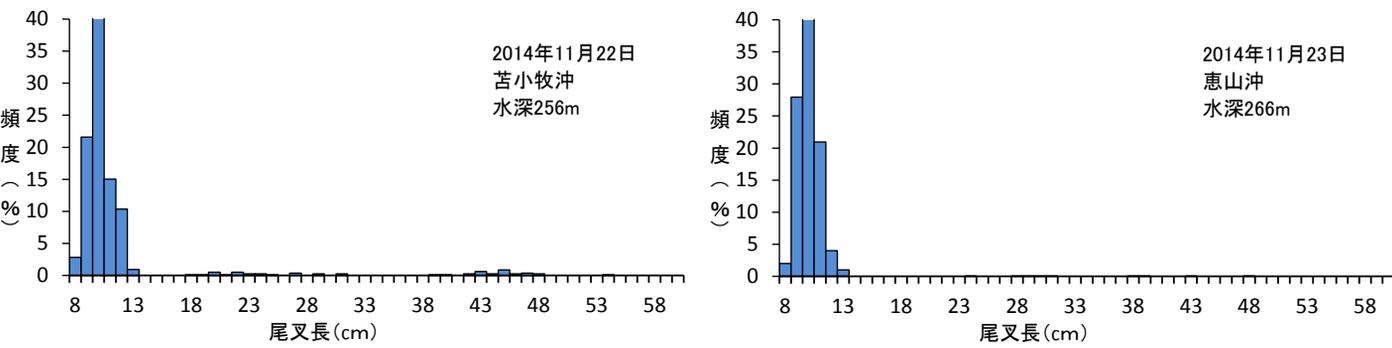


図5 漁獲物の体長組成

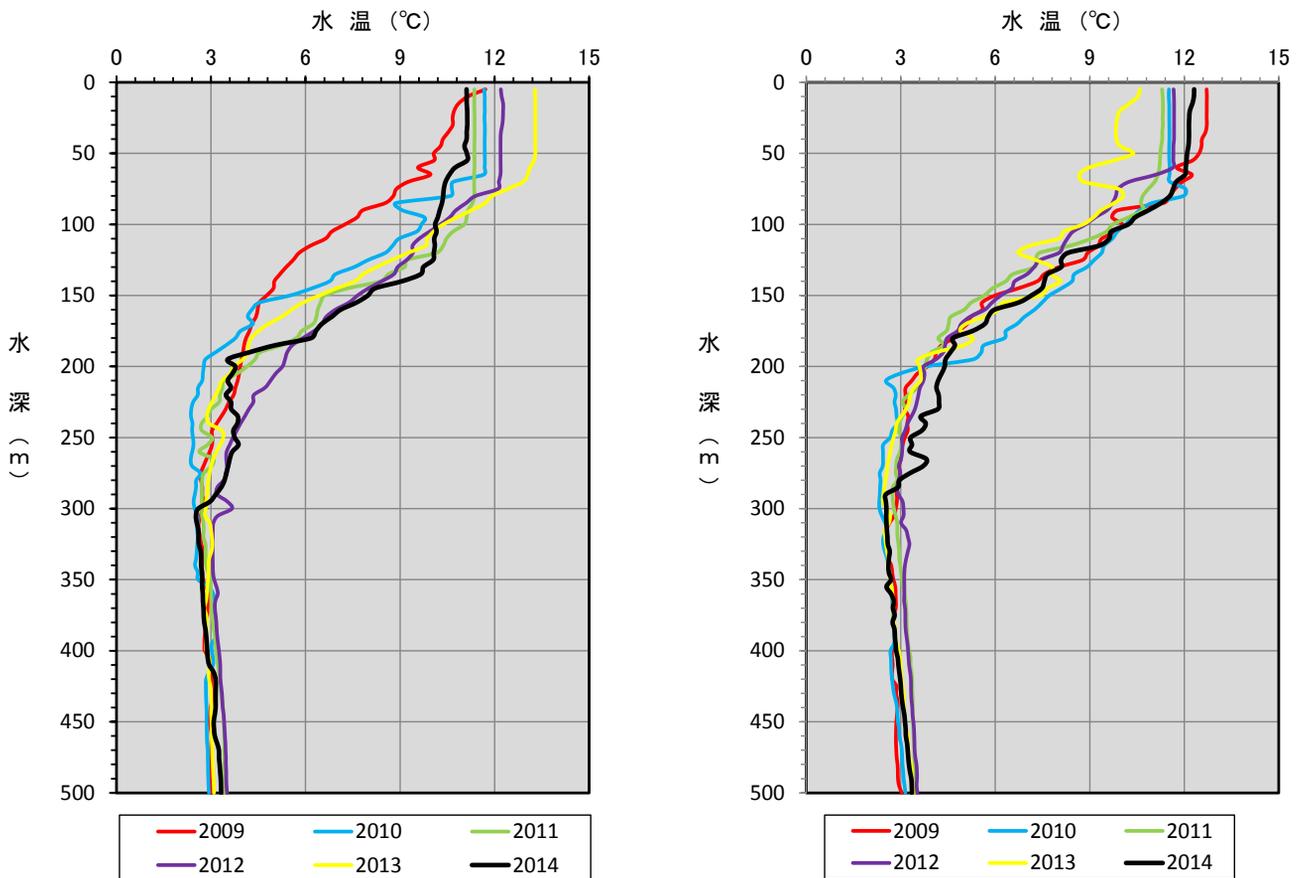


図6 水温の鉛直分布および平年差
左:南茅部沖(N42°ライン沖、右:登別沖(Hライン沖)